

快の笑いに刺激のおもしろさおよび
他者との関係性が及ぼす影響

黒川 光流・前田 己沙

富山大学人文学部紀要第55号抜刷

2011年8月

快の笑いに刺激のおもしろさおよび 他者との関係性が及ぼす影響

黒川 光流・前田 己沙¹⁾

問 題

ユーモアなどによってもたらされる笑いには、他者との間で生起する緊張を和らげる(Hampes, 2001)など、対人関係を円滑にする機能がある。また笑いには、それを表出した個人にとっても効用があることが示されている。例えばCousins(1979 松田訳 2001)は、おもしろい映画やコメディ番組を見て、大いに笑うというごく単純な笑い療法によって、難病とされる膠原病が克服されたことを通して、笑いが身体に与える効果を実証した。

しかし笑いといっても、お笑い番組がおもしろくて大笑いする、挨拶をするときに微笑む、あるいは緊張が解けてほっとして笑うなど、いくつかの種類がある。志水(2000)は、笑いを「快の笑い」、「社交上の笑い」、および「緊張緩和の笑い」の3つに分類している。快の笑いとは、本能や期待が充足されたとき、優越を感じたとき、あるいはおかしさが生じたときなど、快感が表出される笑いである。社交上の笑いとは、人と協調するとき、自分の心の内を防御するとき、あるいは人を攻撃するときなど、快感を伴っていなくても生じる笑いである。そして緊張緩和の笑いとは、精神のおよび身体的緊張を緩和するための笑いである。対人関係あるいは個人に対する効果が実証されている笑いの多くは、快の笑いに相当すると考えられる。

濱・鈴木・濱(2001)は、人がある感情を表出するまでには、内外の環境刺激に対する認知的評価、感情状態、感情体験、および感情表出の4つの位相があると述べている。すなわち、外的あるいは内的環境の刺激に対する認知的評価が行われ、それをもとに感情状態が作り出されると、内的な感情体験が生起し、外的に感情が表出されるのである。快の笑いの場合、笑いを誘発する刺激に対する「おもしろい」という認知的評価に基づいて感情状態が作り出され、それを体験することによって、快の笑いという外的な表出行動が発現すると考えられる。そのため、「おもしろい」という感情体験が生起していないときには快の笑いは発現しない。もし、そのような状態で笑いが表出されているとしたら、それは社交上の笑いあるいは緊張緩和の笑いに相当する。以上のことから、本研究では、快の笑いを「おもしろいという感情に基づく呼吸あるいは発声を伴った笑い」と定義し、快の笑いに影響を及ぼす要因について検討する。

上記の感情表出のメカニズムに基づいて考えると、「おもしろい」という認知的評価あるいは感情体験の程度が高いほど、生起する快の笑いは大きくなると推測される。そのため、笑いは

を誘発する刺激のおもしろさによって、快の笑いが生起する程度は異なると考えられる。すなわち、刺激のおもしろさの程度が高いときには、おもしろさの程度が低いときと比較して、快の笑いが生起する程度は高くなると予想される。

しかし感情の表出は、喚起された感情だけでなく、社会的要因によって変容することが示唆されている(Ekman, 1994)。その社会的要因の1つに他者の存在がある。辰本・志水(2006)は、十分に笑いが起こると考えられる刺激に接した場合、互いに親近感を感じている複数の友人と一緒にいるの方が、単独のときよりも、笑いの表出量が多く、刺激に対するおもしろさの評価も高いことを示している。このことから、友人の存在は快の笑いを促進することが窺える。

また、一緒に刺激に接した他者との関係性によっても、感情表出のなされ方は異なることが示唆されている。山本・鈴木(2005)は、快刺激だけでなく、不快な刺激に接した場合にも、友人と一緒にいたときの方が、未知の他者が一緒にいたときよりも、笑顔の表出が促進されることを示している。また、この友人の存在による笑顔の促進効果を、他者への関心の高まりによって説明している。すなわち、友人が存在する場合の方が、未知の他者が存在する場合よりも、相手の感情を知りたい、相手と感情を共有したいといった気持ちが強くなり、笑顔の表出が促進されたのだと考えている。山本・鈴木(2005)の研究では、不快な刺激も用いられており、また快刺激としてコメディ番組が用いられていたのだが、刺激に対して感じたおもしろさは測定されていない。そのため、表出された笑顔がすべて、快の笑いに相当するとは限らない。しかし、他者との関係性によって笑顔の表出量が異なるのであれば、快の笑いが生起する程度も異なると考えられる。

感情が喚起されたときに一緒にいた他者の行動によって、知覚される感情が異なることが示されている(Schachter & Singer, 1962)。したがって、笑いを誘発する刺激に接したときに他者が存在し、その他者が笑いを表出していれば、自身が知覚していたおもしろさの感情はさらに強くなると考えられる。また、面識のない他者よりも友人に対して、相手の感情を知りたい、相手と感情を共有したいという欲求が高いことが示されている(Jakobs, Manstead, & Fischer, 1999)。したがって、笑いを誘発する刺激に接したときに、一緒にいた他者との関係性が親密であるほど、その他者に向けられる関心は高くなり、他者の存在が感情体験を強くする効果は大きくなると考えられる。他者の存在あるいはその他者との関係が親密であることによって、おもしろいという感情体験が強くなれば、その結果として、快の笑いが生起する程度も高くなると考えられる。すなわち、他者が存在しないときよりも存在するときの方が、またその他者が未知の人よりも知人、知人よりも友人である場合の方が、快の笑いが生起する程度は高いと予想される。

また、他者の存在が快の笑いに及ぼす効果は、刺激のおもしろさの程度によっても異なると考えられる。Perl(1933)は、集団的事態の方が個人的事態よりも、笑いを誘発することを意図

した刺激がおもしろいと判断されることを示している。しかも、他者の存在による感情体験の促進効果は、おもしろさの程度が高い刺激よりも、おもしろさの程度が低い刺激に対して大きいことが示されている。このことから、刺激のおもしろさの程度が低いときには、おもしろさの程度が高い刺激と比較して、他者の存在が快の笑いに及ぼす影響は大きくなるのではないかと考えられる。

以上のことから本研究では、他者との関係性として親しい友人、面識があるだけの知人、および面識のない未知の他者を設定し、そのような他者の存在が、おもしろさの程度が異なる刺激に接したときの快の笑いに及ぼす影響を検討する。

方 法

実験参加者

大学生男性24名、女性40名、計64名が実験に参加した。実験参加者の年齢は18-24歳、平均20.33歳($SD=1.30$)であった。各実験は同性の2名1組で行われ、32組が実験に参加した。

要因計画

刺激のおもしろさ2(高・低)×他者存在2(有・無)×他者との関係性3(友人・知人・未知)の3要因混合計画であった。刺激のおもしろさおよび他者存在を実験参加者内要因、他者との関係性を実験参加者間要因とした。

刺激のおもしろさ 「高」条件ではおもしろさの程度が高いコントが収録された刺激を、「低」条件ではおもしろさの程度が低いコントが収録された刺激を、実験参加者に視聴させた。

各条件の刺激はそれぞれ2つ作成された。まず実験協力者が、約1分間のコント50個を視聴し、各コントのおもしろさを視覚的アナログスケール(Visual Analogue Scale: 以下VAS)を用いて評定した。50個のコントは複数組の芸人が数個ずつ演じていた。実験協力者は研究の目的を知らない大学生15名であった。VASでは、10cmの線分の左端を「おもしろさを全く感じなかった」、右端を「おもしろさをはっきり感じた」とし、左端から実験協力者が付けた印までの長さをmm単位で測定し、その長さをコントのおもしろさ得点とした。次に、50個のコントのうち、おもしろさ得点の平均値が高い方から10個を「高」条件の、低い方から10個を「低」条件の刺激候補とした。そして、「高」条件の2つの刺激でコントを演じている芸人が同じになり、かつ刺激の長さが全体で5分程度になることを基準として、「高」条件の刺激候補10個の中から6個を選出し、3組の芸人が1個ずつコントを演じている様子が収録された刺激を2つ作成した。「高」条件と同様の基準で、「低」条件の刺激候補10個の中から8個を選出し、4組の芸人が1個ずつコントを演じている様子が収録された刺激を2つ作成した。

「高」条件の刺激は3個のコントのおもしろさ得点の平均値を、「低」条件の刺激は4個のコントのおもしろさ得点の平均値を、各刺激のおもしろさ得点とした。各刺激のおもしろさ得点の平均値は、「高」条件の刺激65.60($SD=5.28$)および66.13($SD=11.37$),「低」条件の刺激38.95($SD=11.11$)および40.35($SD=13.50$)であった。これらについて1要因4水準の分散分析を行った結果、有意な主効果が認められた ($F_{(3,42)}=235.12, p<.01$)。多重比較の結果、「高」条件の2つの刺激の方が「低」条件の2つの刺激よりも、おもしろさ得点の平均値が有意に高かった(いずれも $p<.01$)。以上のことから、4つの刺激は各条件の刺激として適切であると判断した。

他者存在 隣り合った2つの実験室それぞれに、刺激視聴用のモニターを1台設置した。一方の実験室のモニターの前には1人がけの椅子を2脚横に並べて設置し、他方の実験室のモニターの前には1人がけの椅子を1脚設置した。

「有」条件では、椅子を2脚設置した実験室で、2名の実験参加者は一緒に刺激を視聴した。「無」条件では、2名の実験参加者は2つの実験室それぞれで、個別に刺激を視聴した。

他者との関係性 「友人」条件の実験参加者は、日頃からよく会話をしたり遊んだりするなど、親しい交流のある友人とペアで実験に参加した。「知人」条件の実験参加者は、互いに面識はあり、会ったらあいさつ程度の会話をするが、それ以外の親しい交流はない知人とペアで実験に参加した。「未知」条件の実験参加者は、初対面または見かけたことがある程度で、交流がない人とペアで実験に参加した。

友人条件には11組22名、知人条件には11組22名、未知条件には10組20名が参加した。

従属変数

笑いの表出 モニターの横で、実験参加者の正面の位置にビデオカメラを設置し、実験参加者の刺激視聴中の様子を撮影した。そのビデオを観察者が見て、笑い表出の累積時間および笑い表出の程度を測定した。笑いを表出しているか否かの判断基準は、発声、呼気、あるいは肩の震えを伴う笑いであることであった。笑い表出の累積時間は、ストップウォッチを用いて秒単位で計測させた。笑い表出の程度は、「1:全く笑っていなかった」から「4:非常に笑っていた」までの4件法で評定させた。観察者は研究の目的を知らない大学生2名であり、笑いの表出を測定するための訓練を事前に受けていた。2名の観察者の笑い表出の累積時間に関する一致率(r)は.92、笑い表出の程度に関する一致率(r)は.81であった。いずれも高い値が得られたため、観察者2名の平均値を分析に用いた。

また実験参加者に、各刺激視聴後、自分自身の笑い表出の程度を、観察者と同様に4件法で評定させた。

刺激に対して感じたおもしろさ 実験参加者に、各刺激に対して感じたおもしろさについて、刺激作成時と同様のVASを用いて評定させた。

他者への関心 他者の存在が気になった程度として「一緒にいる相手の存在が気になりましたか」の1項目、他者の行動が気になった程度として「一緒にいる相手が笑っていることが気になりましたか」および「一緒にいる相手が笑っていないことが気になりましたか」の2項目、他者の感情を知りたかった程度として「一緒にいる相手を感じている気持ちを知りたいと思いましたが」の1項目、感情の共有要求度として「一緒にいる相手と同じ気持ちを共有したいと思いましたが」の1項目、および自己の行動に対する評価懸念として「自分が笑うことに対して、一緒にいる相手にどのように思われるかが気になりましたか」および「自分が笑わないことに対して、一緒にいる相手にどのように思われるかが気になりましたか」の2項目で測定した。実験参加者は、他者存在「有」条件で刺激を視聴した後、各項目に「1：全くそうでない」から「4：非常にそうである」までの4件法で回答した。なお、他者の行動が気になった程度および自己の行動に対する評価懸念は2項目への回答の平均値を分析に用いた。

手続き

他者との関係性の条件に応じて、2名の実験参加者に実験室前に集まってもらった。最初に他者存在「有」条件を実施する場合には、椅子を2脚設置した実験室に2名の実験参加者を誘導し、モニターの前の椅子に横に並んで着席させた。最初に「無」条件を実施する場合には、2つの実験室に実験参加者1名ずつを誘導し、モニターの前の椅子に着席させた。実験の目的を「いくつかの映像を見てもらい、それに対してどのように感じたかを調べる」と説明した後、ビデオ撮影の承諾を得た。さらに、「本来は個別に映像を見ていただくのですが、いくつかの映像についてはDVDが1つしか用意できなかったため、お二人で一緒に見ていただきます」と教示し、実験参加者が刺激を2名で一緒に視聴する場合と、1名ずつ個別に視聴する場合とがあることを説明した。また、刺激視聴に際し、リラックスして椅子に腰かけること、ビデオカメラを意識せず自分が感じるまま素直に気持ちを表現することを教示した。なお、「有」条件のときには、実験参加者同士での会話を控えることを教示した。

その後、実験者はビデオ撮影を開始し、刺激のおもしろさいずれか一方の条件の刺激を再生した後に退室し、実験室の外で待機した。実験者の退室後、実験参加者は5分間、刺激を視聴した。5分後、実験者が入室し、ビデオ撮影を中断した後、実験参加者は、笑い表出の程度および刺激に対して感じたおもしろさを測定するための質問調査票に回答した。なお、「有」条件のときには、他者への関心についても回答した。回答終了後、刺激のおもしろさのもう一方の条件で、実験者によるビデオ撮影の再開と刺激の再生、実験者の退室、実験参加者による5分間の刺激視聴、実験者の入室とビデオ撮影の中断、および実験参加者の質問調査票への回答を実施した。

2度目の質問調査票への回答終了後、最初に「有」条件を実施した場合には、2名の実験参

加者のうち1名がもう一方の実験室に移動し、モニターの前の椅子に着席した。最初に「無」条件を実施した場合には、椅子が1脚設置された実験室で刺激を視聴した実験参加者が、椅子が2脚設置された実験室に移動し、2名の実験参加者がモニターの前の椅子に横に並んで着席した。その後、同様の手続きで、刺激のおもしろさ両条件を実施した。

計4度の刺激視聴および質問調査票への回答終了後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。各実験の所要時間は約45分であった。他者存在および刺激のおもしろさの各条件の実施順序はカウンターバランスをとった。

結 果

笑いの表出

笑い表出の累積時間 各条件における笑い表出の累積時間の平均値を図1に示した。これらについて、対数変換を行った上で、刺激のおもしろさ 2 (高・低) × 他者存在 2 (有・無) × 他者との関係性 3 (友人・知人・未知) の分散分析を行った。

その結果、刺激のおもしろさの有意な主効果が認められ ($F_{(1,61)}=219.45, p<.01$)、「高」条件 ($M=43.93, SD=30.27$) の方が「低」条件 ($M=11.72, SD=13.83$) よりも、笑い表出の累積時間が有意に長かった。また、

他者存在の主効果に有意傾向が認められ ($F_{(1,61)}=3.97, p<.10$)、「有」条件 ($M=30.61, SD=30.74$) の方が「無」条件 ($M=25.03, SD=25.80$) よりも、笑い表出の累積時間が長い傾向にあった。

また、他者存在と他者との関係性との交互作用に有意傾向が認められた ($F_{(2,61)}=2.60, p<.10$)。下位検定の結果、「友人」条件において、「有」条件 ($M=34.66, SD=34.27$) の方が「無」条件 ($M=26.59, SD=29.42$) よりも、笑い表出の累積時間が長い傾向にあった ($F_{(1,61)}=8.53, p<.10$)。

さらに、有意な2次の交互作用が認められた ($F_{(2,61)}=6.50, p<.01$)。下位検定の結果、「低」条件の刺激を「友人」条件で視聴した場合、「有」条件 ($M=17.39, SD=14.01$) の方が「無」条件 ($M=7.44, SD=7.03$) よりも、笑い表出の累積時間が有意に長かった ($F_{(1,122)}=15.87, p<.01$)。

その他の主効果および交互作用は有意ではなかった(他者との関係性の主効果 $F_{(2,61)}=1.29$; 刺激のおもしろさと他者存在との交互作用 $F_{(1,61)}=1.52$; 刺激のおもしろさと他者との関係性との交互作用 $F_{(2,61)}=0.43$; いずれも *n.s.*)

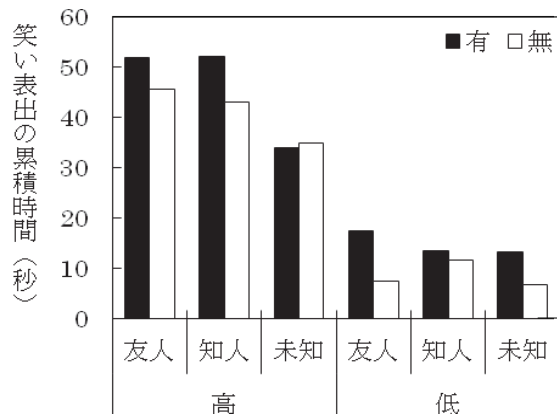


図1 各条件の笑い表出の累積時間

笑い表出の程度 観察者評定
 による笑い表出の程度の平均値を条件ごとに示したのが図2である。これらについて、刺激のおもしろさ2×他者存在2×他者との関係性3の分散分析を行った。

その結果、刺激のおもしろさの有意な主効果が認められ ($F_{(1, 61)}=220.14, p<.01$)、「高」条件の方 ($M=3.00, SD=0.88$)が「低」条件 ($M=1.94, SD=0.77$)よりも、笑い表出の程度が有意に高かった。また、他者存在の有意な主効果が認められ ($F_{(1, 61)}=5.19, p<.05$)、「有」条件 ($M=2.55, SD=0.99$)の方が「無」条件 ($M=2.38, SD=0.97$)よりも、笑い表出の程度が有意に高かった。

その他の主効果および交互作用は有意ではなかった(他者との関係性の主効果および1次の交互作用 $F_S<1$; 2次の交互作用 $F_{(2, 61)}=1.08$; いずれも *n.s.*)。

実験参加者の自己評定による笑い表出の程度の平均値を条件ごとに示したのが図3である。これらについて、刺激のおもしろさ2×他者存在2×他者との関係性3の分散分析を行った。

その結果、刺激のおもしろさの有意な主効果が認められ ($F_{(1, 61)}=64.60, p<.01$)、「高」条件 ($M=3.58, SD=0.58$)の方が「低」条件 ($M=2.93, SD=0.80$)よりも、笑い表出の程度が有意に高かった。その他の主効果および交互作用は有意ではなかった(他者との関係性の主効果および1次の交互作用 $F_S<1$; 他者存在の主効果 $F_{(1, 61)}=2.49$; 2次の交互作用 $F_{(2, 61)}=1.08$; いずれも *n.s.*)。

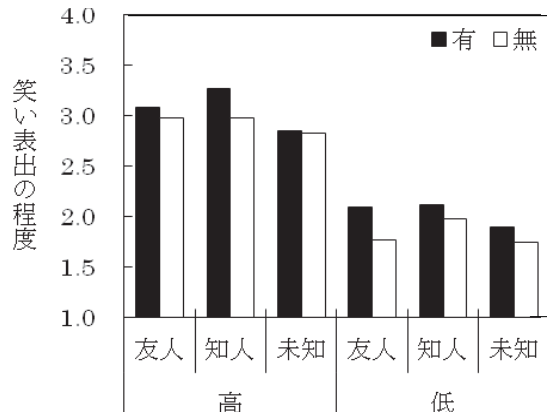


図2 各条件の笑い表出の程度(観察者評定)

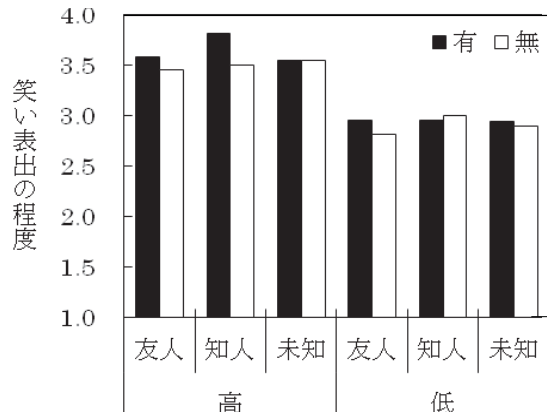


図3 各条件の笑い表出の程度(自己評定)

刺激に対して感じたおもしろさ

各条件における刺激に対して感じたおもしろさの平均値を図4に示した。これらについて、刺激のおもしろさ2×他者存在2×他者との関係性3の分散分析を行った。

その結果、刺激のおもしろさの有意な主効果が認められ ($F_{(1, 61)}=54.60, p<.01$)、「高」条件 ($M=84.74, SD=15.48$)の方が「低」条件 ($M=64.37, SD=26.86$)よりも、

刺激に対しておもしろさを有意に強く感じていた。また、他者存在の有意な主効果が認められ ($F_{(1, 61)}=8.75, p<.01$)、「有」条件 ($M=76.70, SD=23.53$)の方が「無」条件 ($M=72.41, SD=24.62$)よりも、刺激に対しておもしろさを有意に強く感じていた。

その他の主効果および交互作用は有意ではなかった(他者との関係性の主効果および1次の交互作用 $F_s<1$; 2次の交互作用 $F_{(2, 61)}=1.71$; いずれも *n.s.*)。

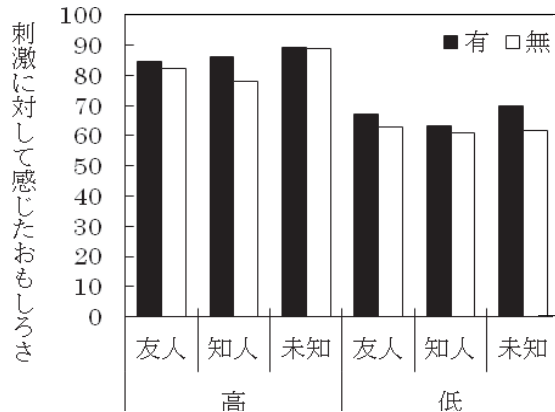


図4 各条件の刺激に対して感じたおもしろさ

他者への関心

他者への関心の各指標の平均値を条件ごとに示したのが表1である。各指標について、刺激のおもしろさ2×他者との関係性3の分散分析を行った。

表1 他者への関心の各指標の条件ごとの平均値

刺激のおもしろさ	高			低		
	友人	知人	未知	友人	知人	未知
他者の存在が気になった程度	2.32 (0.70)	2.64 (0.98)	2.60 (0.80)	2.09 (0.85)	2.41 (0.89)	2.55 (0.92)
他者の行動が気になった程度	2.05 (0.64)	2.25 (0.77)	2.08 (0.78)	2.16 (0.70)	2.18 (0.82)	1.98 (0.77)
他者の感情を知りたかった程度	2.23 (0.95)	2.27 (0.96)	2.40 (0.80)	2.18 (1.03)	2.45 (1.03)	2.25 (1.04)
感情の共有要求度	2.18 (0.89)	2.50 (1.03)	2.35 (0.96)	2.09 (1.00)	2.32 (1.02)	2.05 (0.92)
自己の行動に対する評価懸念	1.84 (0.83)	2.07 (0.88)	2.18 (0.87)	1.77 (0.75)	2.16 (0.83)	2.15 (0.94)

()内はSD

その結果、感情の共有要求度について、刺激のおもしろさの有意な主効果が認められ ($F_{(1, 61)}=6.10, p<.05$)、「高」条件 ($M=2.34, SD=0.97$)の方が「低」条件 ($M=2.16, SD=0.99$)よりも、感

情の共有要求度が有意に高かった。その他の主効果および交互作用は有意ではなかった ($F_s < 1$, *n.s.*)。

他者の存在が気になった程度(刺激のおもしろさの主効果 $F_{(1, 61)} = 2.18$; 他者との関係性の主効果 $F_{(2, 61)} = 1.50$; 交互作用 $F_{(2, 61)} = 0.27$)、他者の行動が気になった程度 ($F_s < 1$)、他者の感情を知りたかった程度(主効果 $F_s < 1$; 交互作用 $F_{(2, 61)} = 1.30$)、および自己の行動に対する評価懸念(刺激のおもしろさの主効果および交互作用 $F_s < 1$; 他者との関係性の主効果 $F_{(2, 61)} = 1.17$)については、有意な主効果および交互作用は認められなかった (いずれも *n.s.*)。

考 察

本研究の目的は、刺激のおもしろさおよび他者との関係性が快の笑いに及ぼす影響を検討することであった。

刺激のおもしろさの程度が高いときには、おもしろさの程度が低いときと比較して、笑いが表出された時間は長く、笑いが表出された程度も高かった。本人も、おもしろさの程度が高い刺激に接したときの方が、笑いを表出した程度が高かったと感じており、また、おもしろさを強く感じていた。以上のことから、接した刺激のおもしろさの程度が高いほど、快の笑いが促進されることが示唆された。

快の笑いを生起させる認知的評価あるいは感情体験は、刺激のおもしろさによって強く規定されるのであろう。そのため、濱・鈴木・濱(2001)が示した感情表出のメカニズムからも予想されるように、おもしろさの程度が高い刺激は、「おもしろい」という認知的評価ならびに感情体験を強くし、その結果として快の笑いを促進したのではないかと考えられる。

ただし、刺激にはコントだけでなく、コントが演じられた場にいた第三者の笑い声も収録されていた。おもしろさの程度が高い刺激の方が、おもしろさの程度が低い刺激よりも収録されていた第三者の笑い声が大きく、それが手がかりとなって、笑いの表出ならびに刺激に対して感じたおもしろさに差異を生じさせた可能性がある。

また、他者が存在したときには、存在しなかったときと比較して、笑いが表出された時間は長い傾向にあり、笑いが表出された程度は高かった。本人は、他者が存在したときの方が、笑いを表出した程度が高かったとは感じていなかったが、刺激に対しておもしろさを強く感じていた。以上のことから、笑い表出の程度に関しては、本人に自覚できるほどではなかったが、他者の存在は快の笑いを促進することが示唆された。

しかし、友人の存在の有無によって、笑いが表出された時間に差がある傾向はあったものの、他者との関係性によって、笑いが表出された時間、笑いが表出された程度、ならびに刺激に対して感じたおもしろさに差異は見られなかった。また、他者への関心の各指標にも、他者との

関係性による差異は見られず、刺激のおもしろさの程度が高いときに、他者と感情を共有したいという気持ちが強くなっていただけであった。すなわち、他者との面識の有無あるいは普段の交流の程度によって、快の笑いが促進される程度に差異は見られず、予想とは異なる結果であった。

辰本・志水(2006)は、友人の存在によって快の笑いが促進された原因として場の共有の効果を挙げている。また伊藤(1994)は、他者との場の共有は情動的な共感をもたらすと述べている。本研究において、他者と一緒に同じ刺激に接するという状況は場の共有にあたると考えられる。そのため、刺激に接したときの他者の存在が、その他者との関係性に拘わらず情動的な共感をもたらし、刺激に対するおもしろさを強く感じさせ、快の笑いを増加させることにつながったのではないかと考えられる。ただし、その効果は本人に自覚できるほどではなかったことから、表出された笑いが快の笑いだけを反映したのではなく、社交上の笑いあるいは緊張緩和の笑いが含まれていた可能性がある。

他者に向けられる関心は、未知の他者あるいは単なる知人よりも、友人に対して向けられる程度が高いと予想していたが、本研究の結果はその予想とは一致しなかった。他者への関心は、その他者とのコミュニケーション欲求の表れと捉えることができる。しかし快の笑いは、おもしろいなどの快感情が表出されるものであり、他者とのコミュニケーションを目的として生起するものではない。そのため、快の笑いが生起するような状況では、一緒に刺激に接した他者が友人であったとしても、他者への関心が特に強くなることがなかったのではないかと考えられる。また、本研究で用いた刺激は、条件によっておもしろさの程度に差異を設けたが、おもしろさの程度が低い刺激であっても、笑いを誘発するのに十分なおもしろさを有しており、実験参加者の関心を強く引きつけたのではないかと考えられる。そのため、相対的に他者に向けられる関心は低くなり、一緒にいた他者が誰であっても、関心の向けられ方に差異が見られなかったとも考えられる。これらのことから、おもしろさの程度が高い刺激に接して、おもしろいという感情体験が強くなると、それを他者と共有したいという気持ちは強くなるのだが、一緒に刺激に接した他者が誰であっても、他者に向けられる関心に差異はなく、その結果として、他者との関係性によって、快の笑いに差異が見られなかったのではないかと考えられる。

本研究では、おもしろさの程度が低い刺激に接した場合、友人が存在したときには、存在しなかったときと比較して、笑いの表出時間が長かった。しかし、友人の存在の有無によって、おもしろさの程度が低い刺激に対して感じたおもしろさの程度に差異は見られなかった。このことから、刺激のおもしろさの程度が低いときに、友人の存在によって増加した笑いは、快の笑いだけに相当するものではないと考えられる。志水・角辻・中村(1994)は、人は何か小さな都合の悪い状態を目の前にしたときにも笑うことを指摘している。これは、目の前に起こった具合の悪い状態をなかったことにしようとする作用をもつ笑いだとしている。友人が存在する

ときに、おもしろさの程度が低い刺激に接した場合、期待していたほどにおもしろさが感じられなかったために、多少の具合の悪さが感じられたのではないかと推測される。そのため、その具合の悪さを解消しようとする気持ちが強くなり、社交上の笑いあるいは緊張緩和の笑いが表出された可能性がある。

本研究では、笑いを誘発することを意図して演じられたコントを刺激として用いた。しかし、笑いを誘発することを意図していなくても、予期されることとは異質な状況に直面すると、その状況に対しておもしろさが感じられることもある。また、快の笑いを生起させる感情には、おもしろさ以外のものもあるだろう。快の笑いを誘発する刺激の内容や、感情の種類についても検討の必要がある。

また本研究で、実験参加者は比較的短時間のうちに4つの刺激を視聴した。そのため、刺激に対する慣れや飽きが生じた可能性がある。先に視聴した刺激によって喚起された笑いやおもしろさの感情が、後の刺激を視聴した際の笑いの表出やおもしろさの感情に影響した可能性もある。刺激に接する前の感情や身体の状態についての検討も必要である。

さらに本研究では、快の笑いが表出されたことによってもたらされる効果については検討していない。快の笑いが表出される程度は同じであっても、一緒に刺激に接した他者との関係性が異なれば、快の笑いを表出したことによる効果が異なる可能性もあり、そのことについての検討も望まれる。

以上のように、改善あるいは検討が必要なことはあるものの、本研究では、刺激のおもしろさおよび他者の存在が、快の笑いを促進することが示唆された。

引用文献

- カズンズ N. 松田鉄 (訳) (2001). 笑いと治癒力 岩波書店
(Cousins, N. (1979). *Anatomy of an illness as perceived by the patient: reflections on healing and regeneration*.
New York: W.W. Norton & Company.)
- Ekman, P. (1994). Strong evidence for universals in facial expressions: A reply to Russell's mistaken critique.
Psychological Bulletin, **115**, 268-287.
- 濱治世・鈴木直人・濱保久 (2001). 感情心理学への招待—感情・情緒へのアプローチ—サイエンス社
- Hampes, W.P. (2001). Relation between humor and empathic concern. *Psychological Reports*, **88**, 241-244.
- 伊藤哲司 (1994). 対面コミュニケーション研究の問題と展望：“符号のやりとり”と“場の共有”をめぐる
茨城大学人文学部紀要 人文学科論集, **27**, 1-44.
- Jakobs, E., Manstead, A. S. R., & Fischer, A. H. (1999). Social motives, emotional feelings, and smiling. *Cognition and Emotion*, **13**, 321-345.
- Perl, R. (1933). The influence of the social factor upon appreciation of humor. *The American Journal of Psychology*,
45, 308-312.
- Schachter, S. & Singer, J. (1962). Cognitive, social and physiological determinants of emotional stage. *Psychological Review*, **69**, 379-399.
- 志水彰 (2000). 笑い／その正常と異常 勁草書房
- 志水彰・角辻豊・中村真 (1994). 人はなぜ笑うのか 笑いの精神生理学 講談社
- 辰本頼弘・志水彰 (2006). 「快の笑い」は他人の存在で増加するか？—筋電図学的研究— 関西福祉科学大
学紀要, **10**, 97-107.
- 山本恭子・鈴木直人 (2005). 他者との関係性が表情表出に及ぼす影響の検討 心理学研究, **76**, 375-381.

注

- 1) 富山大学附属病院医療福祉サポートセンター